

ニュースレター

第22号

令和7年12月
発行

編集・発行

鎌倉女子大学 FD 室
〒247-8512 鎌倉市大船 6-1-3
Tel 0467-44-2111 (代)
E-mail cefd@kamakura-u.ac.jp

はじめに

FD室長 稲川英嗣

一昨年度から今年度にかけて FD 室は、目先のことといわれればそれまでですが、喫緊の課題に取り組んできました。

まず令和 5 年度は、本学全体の授業支援システムの変更に対応して、新システムの周知と情報交換、意見交換の機会を一昨年 9 月、昨年 1 月・6 月と、三度に分けて実施しました。新システムに戸惑う先生がいる一方で、使いこなしている先生からの情報提供などもあり、活発な情報交換が行われました。思えば FD 室はコロナ前も、当時あまり活発に使われていなかった授業支援システムの活用事例を紹介して、さらに多くの活用事例を紹介しようとしていた矢先にコロナ期に突入したという経験があります。現実的な問題に綱渡り的に対応してきたことは相変わらずだと感慨を深くしました。

そして昨年度は、今年度より始まる短期大学部の e-learning course の授業実践の試みを紹介していただきました。セミナーは昨年度終わりの 3 月に実施しました。セミナーは e-Learning Center 長の概要説明から始まり、中島先生に講義系授業の取り組み、薩摩林先生に演習系授業の取り組みを、そして上田先生には新授業支援システムで e-learning course を展開する場合の工夫と課題をお話しいただきました。最後に短期大学部学部長から展望が示され、次年度への期待を高めました。詳細については今回執筆いただいた先生方の論考をお読みいただければ幸いです。

また今回のレターでは、毎年四国でおこなわれる

SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク) のフォーラムへの、FD 室スタッフの参加報告が載せてあります。SPOD フォーラムに 10 年以上参加してきて実感していることのひとつに、FD が FD 単独ではなく、SD と深く関係してきているということがあります。当初の FD は、 Faculty Development と言いながら教授組織の改善より、教員個々人の教育技術の改善に力点を置いてきました。しかしその課題も授業改善アンケートなどを通した授業技術の改善を経て、今は教授組織の、しかも事務機構も巻き込んだ教授組織の改善に課題を移しつつあるということをフォーラムで実感してきました。そうした点もあり今年度はスタッフの箸本さんに四国徳島まで行って、参加してもらった次第です。

SPOD の取り組みを概観する中で、今後 FD 室が取り組むべき課題として、ICT を活用した教育 / 教育 DX をどう推進していくのかというテーマが浮かんできています。これまで FD 室がセミナーで取り上げてきた、教授支援システムの活用、短期大学部への e-learning course の開設に加え、来年度以降は学部での教育メディアクリエーション学環の創設が、本学の教育に新風を吹き込んでくれることに期待したいところです。そこで本学の FD セミナーも、しばらくは ICT を活用した教育 / 教育 DX を扱うことになりそうです。そこでは先生方の新たな実践など紹介する機会としたいと思っています。自薦、他薦を問わず FD 室まで情報をお寄せくださいと助かります。

e-learning courseにおける教授学修過程と課題 — 講義系授業を中心として —

短期大学部初等教育学科 教授 中島朋紀

1 本学通信教育課程開設 e-learning course に 向けて

令和 7 年度より、「日本初の小学校教諭免許が取得できる通信制短期大学 e-learning course」を開設することとなるが、本学（当時第二代学長・松本尚先生）においては、1960 年代に神奈川県委託・教員補充と対策における研修制度を引き受けていた教員養成の歴史があり、15 年間で約 2,700 名もの教員養成（当時 30 才以上の助教諭を研修生・聴講生として受け入れる）を行っていた実績と経緯がある。このような本学の実績と歴史的経緯を接合して鑑みると、今回の通信教育課程 e-learning course 開設は「令和版」通信制短期大学教員養成となる。

(1)授業者（教師）の課題意識

講義・授業は授業者の教育観を反映していると考える。特に授業者がもっとも重視するのは、教師と学生とが同じ空間で対話する、言い換えれば対面して活動することである。また近代大学の精神的な支柱をなすといわれた「フンボルト理念」は、講義（Vorlesung）において教師が自らの学術的探求の過程を学生に話すことによって、学生はそうした探求を間接的に体験し、その精神を学ぶことが想定されていた。こうした意味で対面型の講義・授業は、いわば大学教育の核をなすといつても過言ではない。

こうした授業者の意識を前提とした上で、e-learning course・メディア授業・LMS・ICT 利用のメリットをどのように理解し、展開・実用化していくかが重要な課題である。

(2)学生（学修者）が深い学修になるような授業課題

学生にとってメディア授業は、その授業で何を学生に身に付けさせることを目指すのかという基本的な問題につながる。大学教育は一般に、一定の知識を教育と結びつける考え方、あるいは理論と結びつけながら修得することを目的にしている。基本的に重要なのは、学生自身がどのように学び、また何を学ぶか、という点である。

いかにして学生が自ら主体的にものを考えるかが重要となる。そうした意味での主体性をもつために、基礎的な判断力や思考力が不可欠となる。そして、そのための深い学修をどのように実現するかが問われている。

2 e-learning course の学修態度と学修プログラム

e-learning course は、対面での授業を代替するものではなく、全く異なる新たな学修（個別）の可能性を創出するという考え方である。e-learning course の技術面ばかりを意識し、教育的側面がないがしろにならないように、教育法（pedagogy）を考慮する必要がある。

学生も態度の変革が必要であり、受け身的な学修態度では、e-learning course に臨むことは難しく、自分の学修に主体的に取り組み、責任を持つ覚悟でいなければならない。そして、学生が自律性をもって取り組まなければならない。

【e-learning course の学修プログラムと配慮】

①学修目的・目標を明確にした学修プログラムを設計し、学修効果は測定可能（確認テスト・単位認定試験）でなければならない。また、どの程度の学修効果が達成できれば合格とするかが明確にされていなければならない。

②学修の進捗状況がわかるよう定期的な評価とフィードバックを学生に与えなければならない。

③学生の学修ペースに合わせた学修プログラムを設計しなければならない。

このような学修プログラムを設計・促進する上で、知識・理論・技術あるいは事物、現象が音声、画像、映像（ビジュアル）に表現されることはきわめて大きな意味をもつ。あるいは人間や自然の現象が音声、映像を伴って示されることは、事物そのものに対する疑似的な体験として重要な意味をもつ。さらに e-learning course では、情報・知識・技術についての解説を繰り返し聞き練習することを可能にするという意味で、個人による理解の仕方や修得すべき知識・技術の学修速度の相違の限界を乗り越

える可能性を与え、大きな価値をもつものである。

3 授業者（教師）の教育的信条

授業者（教師）には、学生の知識や能力というものの性質（成人学生 Andragogy）、学修者自身がどのようにしてそのような素質・能力を引き出せるのか、学生にどのような指導ができるのか、といったことなどに対する信条がある。つまり、教育に対する考え方（教育哲学

pedagogical philosophy）がある。学修プログラム・授業を設計する教師は、何らかの信条に従って行っているのであり、それを明確にすることなしに授業設計を行うと、実際の学修目標が見えてこない恐れがある。授業者（教師）の教育哲学を大事にし、教師自らの授業・教育活動を内省しながら、よりよい e-learning course の学修プログラム・メディア授業を目指していかなければならない。

e-learning courseにおける教授学修過程と課題 — 演習系授業を中心として —

短期大学部初等教育学科 教授 薩摩林淑子

通信教育課程 e-learning course の開設を間近に控えた3月のFDセミナーにおいて、e-learning course における演習系授業（「音楽」「保育内容演習表現」）の教授学修課程と課題について報告した。通信教育課程の授業開始に向けて、授業動画の作成に取り組む日々が続いていたが、実技・演習を中心の音楽系授業の動画作成にあたりどのような工夫を行ったか、実際にどのような動画を作成したか、また、その過程で生じた課題をまとめて報告したことにより、コロナ禍より継続して行ってきた音楽系授業動画作成の取り組みを振り返る大変良い機会となった。

1 音楽

「音楽」については、授業の概要、実技・演習授業の実施方法、音楽教材動画の作成方法、学生側からみた音楽実技授業の学びの内容を報告した。「音楽」は、ピアノ実技、弾き歌い、楽典理論の3本柱で授業を構成し、ピアノ実技と弾き歌いが実技演習形式、楽典理論を講義形式で実施する。全15回のうちメディア授業11回、対面スクーリング4回であるが、実技・演習を中心の「音楽」では、学生の継続的な自主練習、予習・復習が重要になってくる。授業の実施方法として、まずピアノ、弾き歌いの課題曲（初・中・上級：各2-3曲）を提示する。学生は、課題曲の模範演奏動画と、曲説明の動画を視聴してから実技練習に取りかかる。模範演奏動画の作成方法として、ピアノ曲の模範演奏動画は教員によるピアノ演奏をビデオ撮影した。学生の模範となる演奏を行うとともに、手の動きがよく見えるようビデオ

の位置、高さ、向きを工夫するなど試行錯誤した。弾き歌い曲の模範演奏動画の作成についてもビデオ撮影を行ったが、こちらはピアノ伴奏にフォーカスした動画と歌唱にフォーカスした動画（歌う時の表情や口の動きをアップで捉えた動画）をそれぞれ撮影し、2種類の動画を動画編集ソフトで合わせ、曲のタイトルや歌詞を字幕で付けた。弾き歌い曲の模範演奏動画は、本学で音楽科目を担当する教員で協力し、50曲以上を作成した。これらの模範演奏動画は、繰り返し聴くことができるため学生の学びに有効な教材になると同時に、教員にとっても授業内容に応じた様々な活用が可能となる有益な教材となった。FDセミナーでは、会場の先生方に数種類の模範演奏動画をご覧いただいた。「音楽」のまとめとして、本科での対面授業と、通信教育課程のメディア授業における学生側からみた実技の学びの内容をまとめ、通信教育課程においても可能な限り対面授業の内容に近づけるよう工夫してきたことを報告した。

2 保育内容演習表現

「保育内容演習表現」については、音楽演習のための教材動画の例と、通信教育でどのような演習が可能になるかという点を報告した。表現の授業で大切なことは、子どもの表現活動を支える音楽表現力を習得するために、学生が音楽演習に主体的・積極的に取り組むことである。そのため動画作成においても、教員側が意図する教授内容が効果的に伝わるような、学生が主体的・積極的に取り組めるような動画内容になるよう意識した。FDセミナーでは、「先歌い」（伴奏法）の演習動画、楽器奏

法の説明動画、楽器演習・合奏の教材動画を取り上げて会場の先生方にご視聴いただいた。どの動画も実際に教員が模範演奏する様子をビデオ撮影し、楽譜編集ソフト・動画編集ソフトを駆使して教材動画としてまとめたものである。この教材動画で学生がどのような演習を実践するのかについても報告した。

最後にメディア授業の利点と課題を3点ずつ挙げてまとめとした。メディア授業の利点は、授業内で用いる模範演奏動画が繰り返し何度も視聴できるという点、音楽は「音」を聴くことが大切な科目であるがメディア授業を通して「聴く」経験を多く持つことができる点、試験

課題として演奏動画提出が課されることで自らの演奏を客観的に聴く機会ができ、実技力を磨くことに繋がる点が挙げられる。一方、課題として、教材動画の音質の向上、楽器演習授業の際の学生への指示の出し方、演奏動画のスムーズな提出のための指示の仕方を挙げた。

セミナー後に、複数の先生方からお気付きの点や感想、課題修正に向けてのご助言をいただくことができた。感謝を申し上げたい。今回の報告をふまえ、更に一層充実した学修過程の構築と動画教材作成に取り組みたいと考えている。

「授業コンテンツ UNIPAの試行錯誤と課題」

短期大学部初等教育学科 准教授 上田陽子

令和6年度 第2回FDセミナーが、3月12日大講義室にて開催され、通信教育課程の概要並びにe-learning courseにおける具体的な授業実施方法と課題についての情報共有を行った。まずは、通信教育課程の教授学習過程と課題に焦点を当て、講義系授業と演習系授業それぞれの事例が初等教育学科の中島先生および薩摩林先生から共有された。その後、私からは、「授業コンテンツ UNIPAの試行錯誤と課題」と題し、具体的な操作方法と留意点について示した。

まず、通信教育課程の授業においては、学生の学習を管理するため、ポータルサイト内にコースの作成が必須である。

1. コース作成と学習フロー設定

ポータルサイト上でコースを設定する際、学生が全ての学習項目を終えないと次に進めないよう、学習方法を「選択」から「順次」へ変更することが必要である。

2. 各種コンテンツの登録と留意点

- ・コンテンツ（動画等）：動画などのファイルサイズは、1GBまで（学生側の通信環境も考慮）という目安があり、これを超えるとアップロードが難しい。また、作成したコンテンツ等は次年度以降の利用を見据え、学習リソースへコピーしておくことを推奨する。
- ・授業資料：資料が多い場合は分割して登録すること

を推奨する。ただし、資料が提示されていると学生が動画を閲覧せずに授業を済ませてしまう可能性もあり、利用には留意が必要である。

・テスト：テスト設定では、テスト期間や進度反映方法などを詳細に設定できる。特に、進度反映方法で「参照済」を選ぶと学生がテストを閲覧しただけで課題一覧から消えてしまう可能性があるため、また、テスト実施済では、合格点に到達していないとも次の学習項目に進むことができてしまうため、設定には注意が必要である。公開設定において「採点結果を学生本人に公開する」をチェックしておくと、学生がテスト結果を確認できる。問題スタイルには、「穴埋め式」や「マッチングスタイル」等、様々ある。

3. 単位認定試験の事例

テストでの実施が基本はお勧めであるが、演習系の授業では、例えば、「部分実習指導案をもとに模擬保育を実施し、その姿をスマートフォンやビデオカメラなどで撮影したファイルを提出する」といった形式も一つの方法である。

4. 今後の課題と教員間で共有すべき事項

ポータルサイトを用いた授業運営において、今後解決すべき課題や共有事項として、以下の点を挙げる。

- ・学習リソースへのコピー：次年度以降利用のため、

作成したコンテンツやテストを学習リソースへコピーすることを推奨する。

・確認テスト実施の工夫：「200字で記述」のような記述式（記入式スタイル）は採点が必要となるため、多用する場合は工夫が必要である。

・運用確認：授業開始前に、仮学生IDとPASSでログインし、学生視点での確認・操作を行うことを推奨する。

・情報共有：春セミナーで学生から出た質問や、既にテスト環境にアップロードした教員間でのお勧めのコンテンツ・テストの共有を行う場を設定する。

今回のFDセミナーを通じ、通信教育課程における教育の質を高めるための具体的なノウハウと、ポータルサイト運用上の技術的・教育的な課題を共有する貴重な機会となり、今後も継続していきたい。

「SPODフォーラム2025」参加報告

教務部FD室 箕本拓生

「SPOD フォーラム 2025」への参加について、ご報告いたします。

SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）は、四国地区の36の国公私立大学などが連携して、教職員の能力開発を目的とするFD（ファカルティ・ディベロップメント）とSD（スタッフ・ディベロップメント）の共同開発に取り組む組織です。

四国地区は伝統的にFD・SDの活動が活発に行われていますが、毎年8月に行われるSPOD フォーラムは会員校以外からも参加可能なイベントとして開催されており、本学からもFD室に所属する教職員が継続して参加してきました。今年は徳島大学を会場に3日間にわたって約40のプログラムと情報交換会が行われ、全国の高等教育機関から約500名の教職員が参加しました。

私自身にとっては今回が初めての参加となりましたが、各プログラムは教員の授業運営、事務職員の業務改善、教職員の学生対応等に直結する実践的な内容で構成されており、運営側および参加者の熱意と豊富な知見に触れることができ、大変有意義な3日間となりました。

特に印象的であったのは、香川大学 DX 推進研究センターによる「業務システム内製開発」についてのプログラムです。情報伝達の迅速化、業務の効率化や学生・

教職員が各種申請等を行う際の利便性向上に資する内容であり、同大学ではマイクロソフト社のアプリケーションを活用したノーコード・ローコードによるシステム開発を教職員と学生が協働して進めており、一部の開発成果はホームページ上で学内外に公開・提供されています。

SPOD フォーラムで実施された各プログラムは教員・職員の立場や所属する部署を問わず、すべての教職員にとって参考となる実践的な内容であると感じました。

以下に、SPOD および香川大学 DX 推進研究センター等の関連情報をご紹介いたしますので、ご活用いただければ幸いです。

【SPOD】

<https://www.spod.ehime-u.ac.jp/>

【香川大学 DX ラボ】

<https://dx-labo.kagawa-u.ac.jp/>

【愛媛大学 FD・SD チャンネル】

https://www.youtube.com/@aidai_fdsd/videos

◆ SPOD フォーラム 2026について（予定）

開催日程：2026年8月26日（水）～28日（金）

開催場所：愛媛大学 城北キャンパス